

元気よく間違う！（6年生：狂言学習）

今年度も、6年生は狂言学習に取り組んでいます。6年生に期待していること、期待されていることは、『自分たちで考えた、今の6年生にしかできない狂言』を演じることです。そして、『附子』チームは『附子』チームで知恵を出し合い、『柿山伏』チームは『柿山伏』チームで知恵を出し合い、自分たちの表現をチームとして完成させてほしいと思っています。自分の演技が、自分より前に演じた人の演技（心）を引き継ぎ、次の人（自分より後に演じる人）につないでいく、チームとして一つの演目を仕上げたいと思っています。そういう意味で、自分の担った役（登場人物）を自分たちなりに精一杯理解し演じて、「山口先生、私たちの登場人物を理解した演技はいかがですか？」と思いをぶつけていってほしいです。山口先生は、それ（元気よく間違う）を6年生に求められています。そういう6年生のチャレンジ精神を期待しておられます。待っておられます。山口先生は、「一生懸命に演じているけれども上手いかわない。そういう人を前にした時何とかわしたいと思っています。」とおっしゃいました。6年生のみなさん、失敗を恐れず、チャレンジしましょう。



『附子』は、大の毒！向こうから吹く風に当たただけでも滅却してしまう恐ろしいものです。

太郎冠者は、どんな仰ぎ方をすればよいでしょうか？左腕の高さはどのぐらいの高さがいいのでしょうか？左手で身を守ります。

『附子』は恐ろしい物！目線を外すことはできません。

身のかげめ方は？大の毒の風に当たらないように体を低くして近づいて行こう。

一挙手一頭足に気を配るようにしましょう。

次郎冠者は、いやいやついて行っています。私はこんなことに付き合いたくないと思っています。いつでも逃げる体勢ができています。

仰ぐのは絶対にやめないように！

自分のキャラで演じません。自分のふだんを封印して役を演じます。太郎冠者と次郎冠者に変身します。自ずと笑いの質が違ってきます。

セリフを読んでいるうちに、太郎冠者や次郎冠者がしたいことを想像できるはず。その想像したこと（自分が思ったこと）を演じて、（山口先生の前で）試してください。そういう状態で稽古に臨んでほしいです。

舞台に立つと、何百という目が舞台上のあなたたちに注がれます。多くの人に観られています。その多くの人に観られているという怖さを経験してほしいと思います。そして、それに負けずに、しっかりとした意思をもってほしいと思います。それができた時に、アドバイスができます。

『柿山伏』の稽古より

山伏は、修行を終え神通力を得て自信に満ちています。いばっています。



いばっている山伏が、猿の真似をさせられて面目丸つぶれになったところを演じます。自分ではなく山伏になって演じます。



自分の殻を飛び出し、新たな人格を演じます。自分のキャラ感の中で演じると、ちっちゃな演技になっておもしろくありません。



セリフは早口にならないようにしましょう。聞いている人（観客）を無視してはいけません。演じている人がいて、観客がいて、初めて演技が成立します。セリフや気持ちを相手（観客）に投げかけましょう。観客を巻き込んでいきましょう。

セリフをいう時は、お腹に力を入れて、ゆっくりたっぷり、息を吸ったり吐いたりしましょう。息をたっぷり吸う時に間ができます。



次回の課題は、『役をつくる』です。自分を演ずるのではなく、役を理解し役になりきって表現しましょう。

《山口先生の言葉》

6年生のみなさんが、山口先生に食らいついてくれるので教え甲斐があります。「上手になっていく自分」＝「本番に向かっていく自分」です。自分で目標を立てて頑張ってください。楽しみです。